

---

# IS <インフィニット・ストラトス> 馬鹿の集いしIS学園

カルボナーラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS <インフィニット・ストラトス> 馬鹿の集いしIS学園

### 【Nコード】

N7940S

### 【作者名】

カルボナーラ

### 【あらすじ】

ISにバカテスを組み込んで設定をいじった作品です。文才の無い作者の処女作なので感想とかくれると嬉しいです。更新は遅めです。

## プロローグ

第一話 女だらけの学園、例外の五人の男達

「うん」

「はあ」

藍越学園と思っている（IS学園）の試験会場で迷っている男子が五人いた。

「なあ」

ここで赤い髪の方が呆れたような顔で、唸っている二人に尋ねた。

「ん？」

声をかけられた二人は唸るのをやめて声の主に聞き返した。

「なにじゃねえだろ（じゃろ）！！」

三人は声を合わせてそう言った。

「もう、後試験開始時間まで20分しかねえじゃろうが！！」

いきなり美少女と間違っような少年が声を上げた。

「……しかもまだ試験会場の教室すら見つかってない」

無口そうな少年が続いて言った。

「だ、大丈夫だよ、後、5分までに入ればセーフだよ」

道案内をしていた馬鹿そうな少年が言った。それに続いて容姿の整った少年が言った。

「でも、マジでやばくなってきたな」

「仕方ない、次に見つけた扉に入ろう、そこで聞けばいいだろう」

「その手があったか、流石は雄二だね」

雄二と言われた赤い髪の男は手で頭をおさえて呆れたような口調で言った。

「それぐらいは気がついてくれ、明久」

そう言われた案内人は、

「まずい!!!早くしないとマジで遅れちゃう!!!秀吉、ムツツリー  
二、一夏早く行くよ!!!」

そう言っで見つけた部屋に走る明久を秀吉、ムツツリー二、雄二、  
一夏が追いかけて扉の前に立って息を整え。

「「「「失礼します」」」」」

そう言った五人は部屋に入るとそこには西洋風の鎧に似た機会が鎮座していた。

「これは、ISか？」

「何でこんな所に？」

「それはわからんが確かにISじゃ」

「・・・ミステリー」

「へえ、これがISか」

そう言つて一夏がISに触れると、

――ギンツツツツ――

スキンバリアー  
- 皮膜装甲展開、・・・完了。

スラスタ  
- 推進機正常作動、・・・確認。

- 近接ブレード、・・・展開。

- ハイパーセンサー最適化、・・・終了。

「「「「はあ？」「」「」」」

一夏は勿論、明久と雄二、秀吉、ムツツリー二も驚いて固まっていた。そして、

カタカタカタ――

数人の足音が聞こえてきた。

「おい！早く解除しろ！！」

「なんでだ？」

「馬鹿かお前は？見つければ異例のISを使える男という事で、<sup>モ</sup>実験だぞ？」  
<sup>ルモット</sup>

それを聞いて三人は納得し、一人は冷や汗を流し始めた。その時、

「こら！！そこでなにをしている、ここは関係者以外立入禁止だ・・・」

そこまで言って部屋に入ってきた四人の女性は固まった。

「馬鹿な、男でISを使えるなんて」

「すぐさま上層部に連絡を取って指示をもらうわよ」

「「「はい！」「」」

そう言うと一人は部屋を出て行き、三人が五人のいる部屋の鍵を掛けた。

「どうしよう、雄二」

「くそ、こうなっては、手の内用がねえ」

「わしらはどうなるんじゃ？」

「・・・わからない」

そう言つて四人は一步後に引きISに手が触れた、その時。

「……きん!!……」

「「「「あれ?」「」」」

ISが四人にも反応した。

「え」とこれはひよつとして反応しちゃった感じ?」

「どうやら、俺らにも反応したようだな」

「「「「はあ」「」」」」

翌日

「昨日、ISを動かせる男が、五人見つかったとのIS学園から正式な発表がありました。」

その日、五人はIS学園に入る事が決定した。

## 第一話 女だらけのIS学園（前書き）

ども、カルボナーラです。

さうさと、戦闘まで持つて行きたいのでがんばります。



## 第一話 女だらけのIS学園

「「「「「はあ」「」「」」」」

五人は織斑家のテーブルに突っ伏していた。

「なあ」

「どうした？」

「俺達明日、IS学園に入学するんだよな？」

「ああ、そのとおりだが？」

明日は、IS学園の入学式だが五人は乗り気ではなかった。

「これからどうなるんだ？」

「簡単だろ？マスコミやら各国大使、遺伝子工学研究所の人間が来なくなる。

変わりに、好奇の目が向けられるだろうな」

「きついな」

「仕方ないじやろ、わし等は、異例の『ISを動かせる男子』なんじゃからの」

「何を言っているの？秀吉？秀吉はどこからどう見ても、美少女じゃないか」

「違うんじゃない！！わしは男じゃ！！」

「そこまでしとけ明久、明日からは、特にムツツリー二には戦場なんだから、無駄な体力は使うな」

それで五人は解散となった。

- - - - -  
- - - - -

翌日 1 - 1 教室 - 明久サイド -

「全員揃ってますねー」

教壇に立った副担任の山田先生（さっき自己紹介してくれた）が言った。

「それでは、SHRをはじめますよー」  
ショートホームルーム

「・・・・・・・・・・」

けれど教室の中は変な緊張感に包まれていて、誰からも返事がない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

ちよつとうつろたえている副担任がかわいそうだから、僕ぐらい返事してあげようと思ったけれど、

緊張感に負けて返事できなかった。

なんでかって？

簡単だ

僕たち五人以外のクラスメート全員女子なんだから。

しかも、席が真ん中の最前列の二列を使って僕、一夏、雄二、ムツツリー二、秀吉の順だ。

「・・・くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ」

僕と同じことを考えていたのであろう一夏は声が裏返ってしまっていた。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？

ゴマンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始めて今『お』の織斑君なんだよね。

だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

気がつくとも山田先生が一夏にぺこぺここと頭を下げていた。

今は女尊男卑なだけあって、妙に偉そうに接してくる女性教師が多いが、

どうやら、山田先生は違うようだ、もし、女性「偉い」の構図に沿った対応をしてくる教師だったら、

どうしようかと思っていたが大丈夫そうだ。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っっていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

がばつと顔を上げ、一夏の手を取って熱心に詰め寄る山田先生、

……一夏はまた、クラスが注目を浴びてるな。

しかし一夏はやると思った以上やる男だ、一夏曰く『男子たるもの引くわけにはいかない』らしい、

最初で溝を作ると二度とこの環境に馴染めないと思って間違いないだろう。

一夏はしっかりと立ち上がって、後ろを向いた。

(うつ……)

「(馬鹿な！あの一夏が戸惑ってるなんて！)」

「(ありえないだろ！こういうことには俺らの中で一番馴れているあの一夏だぞ！?)」

雄二と明久、ムツツリーニ、秀吉は驚いていた。

一夏は五人の中で最も挨拶の時に緊張しない男だからだ。

その一夏が目の前で戸惑っている。この事実は明久達は信じられないものだっただ。

「えー……えつと、織斑一夏です。よろしくお願いします。」

一夏は意を決したのかそう言うのと頭を下げ、上げる。

すると、クラスの女子は『もっと色々喋ってよ』的な視線がとんだ。そしてこの『これで終わりじゃないよね？』的な空気が出来上がった。

ていた。

一夏は俺達に『助けてくれ』というような視線を送ってきたが、

「「「「（ゴメン無理だ）「「「「

という視線でのやり取りがあつた。

自己紹介を終われない一夏。

何せ目の前には『もっと聞きたいなあ！』という女子からの期待に満ちた視線。

（一夏はこのまま黙ったままだと『暗いやつ』のレッテルを貼られてしまうな）

一夏は何かを覚悟したようだ。

「以上です」

がたたつ。思わずずっとこける女子が数名いた。

（一夏にどんだけ期待してるんだよ）

そう思っていると、

「あ、あのー……」

山田先生が涙目で声をかけた。

パンッ！

とてもいい音が響いた。

「いつ　！？」

痛そうだ、と思うより先に僕は固まっていた。

僕達の前にはよく知っている人が立っているのだから当然だ。

一夏も気づいたらしくギギギッ！という効果音が似合いそうなほど  
ゆっくりと振り向いた。

「……………」

そこには、黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、狼を  
思わせるほどの鋭い吊り目。

「げえっ、関羽！？」「死神だ！？」「千冬さんじゃと？」「魔  
王だ！？」「…破壊神！？」

パンツ！ドスッ！スパパンツ！

「誰が、三国志の英雄か、死神や魔王、破壊神だ！あと、学校では  
織斑先生だ、馬鹿者！」

「今僕だけ明らか威力が違ったよね！？」

ゴスッ！

バタン！

「教師には敬語を使い吉井」

「「「げえっ！鉄人！」「」」

ゴスッ！ゴスッ！ゴスッ！  
ドサッ！

「鉄人じゃない西村先生だ」

「…なんで西村先生がここに？」

「貴様らは、問題児だからな、この俺が、お前達の面倒を見ることになった」

「嫌な予感が当たったか」

「どういうこと？雄二」

「簡単だ、俺達に面識があつて、  
一人で俺達の脅威の対象であつた鉄人を送ることによって、俺らの  
行動を制限するということだ」

「つまり、わしらを逃がさないための保険というわけじゃな？」

「そういうことだ」

「もしかして、鬼の補修もあるということ？」

「何が鬼の補修だ、もちろん補修はある」

正直悪夢であつてほしい、  
鉄人の補修は『趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎という理想的  
な生徒にする』という地獄である。

「あ、織斑先生、会議のほうは終わられたんですか？」

「ああ、山田君クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

あんなに優しい千冬さんのこえ初めて聞いた。

「い、いえっ。副担任ですからこれくらいはしないと……」

いつの間にか立ち直っていた山田先生が応えていた。

「諸君、私が織斑千冬<sup>おりむらちふゆ</sup>だ。」

「諸君、私は戦争が大好きだ」

バシン

「誰が大佐か」

「~~~~~!?!」

痛い痛すぎる、回避も防御も許されないなんて、しかも、意識が失うことすら許されないなんて鬼だ！

バシン

「今何か、失礼なことを考えていなかったか？」

「いえ、何も」

「ほう」



バシンバシン

「すみませんでした！自分、調子乗ってました！」

「解ればいい」

「ゴホン、邪魔が入ったが君達新人を一年で使い物にするのが私の仕事だ。

いいか、私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。

出来ない者には出来るまで指導してやる。

逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

なんと言っ暴力宣言。

間違いなく一夏の姉の千冬さんだ。

だが、周りからは黄色い声援が響いた。

えっ、何で？

「キャー千冬様、本物の千冬様よ！」

本物じゃなかったら怖いでしょうが。

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！北九州から」

別に南北北海道でもいいじゃないか？

「あの千冬様にご指導いただけるなんてうれしいです！」

「私お姉さまのためなら死ねます！」

いや、命は大切にしようよ。

死んだらもう何も出来ないよ？たぶん

「…毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

千冬さん人気は買えないんだよ？  
もっと優しくしてもいいと思うよ。

「きゃああああつ！お姉様！もっと叱って！罵って！」

……えっ？

「でも時には優しくして」

「そして付け上がらないように躑をして〜！」

大変だ、クラスの大半が変態だ。  
けど、元気でなによりだね〜。

「で、まともに自己紹介もできないのか？お前は？」

「いや、千冬姉」

バシーン！

「学校では、織斑先生だ、さっきも言ったばかりだろうが、お前の学習能力は吉井並か？」

「失礼だな、俺は明久ほど馬鹿じゃない！」

「失礼な、僕はちょっと人よりお茶目なだけだ！」

バシン！バシン！

「いい加減に学習しろ、馬鹿者！」

「はい、織斑先生」

「とにかく、お前達も自己紹介しろ」

「はい、吉井明久です。趣味はゲームです。よろしくお願ひします」

「坂本雄二だ、趣味はゲームだよろしく頼む」

「木下秀吉じゃ、趣味は演劇、特技は声帯模写じゃ、よろしく頼むんじゃ」

「土屋康太、趣味は写真撮影、よろしく」

「…物」

「?」 「?」 「?」 「?」 「?」 「?」 「?」 「?」

「「「「「「「「「「  
「きや ああああ!」  
「「「「「「「「「「

馬鹿な！ソニックウエーブだと？

「このクラスに男子五人とも揃った」

「しかも、みんなかつこいいい！」

「地球に生まれてよかったー！」

女子って皆こうだったわけ？

何でこんなにハイテンションなんだ？

「五月蠅いぞ静かにしろ」

織斑先生の一言でクラス全員が静かになった。  
織斑先生凄すぎ。

静まると、山田先生が織斑先生に質問をした

「ところで先ほどからいらっしやるそちらの方は誰ですか？」

「紹介が遅れたな、特別に教育委員会から来た教師の方だ。挨拶をお願いします。」

「解りました、皆さんはじめまして、

今日からこの学園の教師になり、山田先生同様このクラスの副担任になりました。

西村宗一にしむらむねいちです。一年間よろしくお願いします。」

「」「」「よろしくお願いします」「」「」

「ところで千冬姉」

パンツ！知ってる？千冬さん、頭を叩くと脳細胞が五千個死ぬらしいよ。

「織斑先生と呼べと何度言えかわかる？」

「……はい、織斑先生」

おや？周りが騒がしいぞ？

「えっ……？、織斑君って千冬様の弟？」

「ああっ、いいなあ、ほしいな」

よし、最後のは聞かなかったことにしよう。

ところで、何で僕達がIS学園の試験会場にいたかというところ、配布された資料の手違いで、

藍越学園ではなくIS学園の試験会場に来てしまったというわけだけど、それだけならIS学園に入学するなんて話にはならなかっただろう。

あるうことか、僕達は男でISを動かしてしまったのだ。

「ところで織斑先生、明久達と西村先生は知り合いなんですか？」

「ああ、西村先生は、小学、中学、高校、大学全ての教員免許を持つていて、

全ての教科を教えることの出来る教師だ、そして、中学での吉井達の担任教師だ」

そんなに凄かったのか、鉄人は、そんなことははじめて知った、

鉄人は何でも出来ることは知っていたけど全ての教員免許を待っているとは、初耳だ。

「SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。

その後実習だが、基本動作は半月で染みこませろ。

いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

なんという、鬼教官だ。

バシーン！

SHRの終わりを告げるチャイムが何かの打撃音でかき消された。

サイドアウト

- - -  
- - -  
- - -  
- - -

一夏サイド

「あー……」

参ったこれはまずい。ダメだ。ギブだ。

一時間目が終わり。現在休み時間。廊下からは学年を問わずに視線が向けられている。

女子同士が牽制しあっているせいで俺達は、どうすればいいのか解

らないでいた。

十年前に発表されたISのせいで、世の中は、女尊男卑になり『女  
「偉い』』という構図が出来てからは、  
酷い一言だ。

歩いているだけで、見知らぬ女性に『ちょっとそのあなた、自  
販機で飲み物買ってきなさい』

といわれて、パシラされてしまう。断ると警察を呼んで『いきなり  
この人に殴られたんです』と言われただけで即逮捕だ。

そういうご時世に、突然対等な立場の人間が出てくると、当然、好  
奇心が湧くと言っただけで、  
廊下に人だかりが出来ていた。

しかも、俺の場合は、ブリュンヒルデの弟というプロフィールまで  
つくと、話がややこしくなる。

「ねえ、一夏？」

「何だ？」

俺の左隣に座っている、明久が話しかけてきた。

「僕達はこの学園に馴染めるかな？」

「それは難しいな、俺達以外女子のIS学園において、変な動きは  
できない」

この質問に答えたのは雄二だった。

「しかも、わしらの唯一の休息も一週間でおさらばになるじゃろう

しの」

「…下手な動きは鉄人がいるから無理」

「」「」「はあ」「」「」

「ちょっといいか」

俺達がため息をついてると、いきなり後ろから声をかけられた。

「…箒？」

「……………」

目の前にいたのは、六年ぶりの再開になる幼馴染だ。  
篠ノ野箒。俺が昔通っていた剣術道場の子。

「屋上で良いか？」

「あ、ああ」

「行ってらっしゃい、一夏」

「早く帰って来いよ」

「次の時間は織斑先生の授業なんじゃ、遅れるでないぞ、わしはまだ、友の亡骸を見たくはないのじゃ」

「あ、ああ、急いで行って、急いで戻ってくる」



「『『健闘を祈る（んじゃ）』『』『』」

屋上についてから箒は喋りかけてこなかった。  
呼んでおいてこれは酷いじゃないか？  
仕方ない、俺から話すか。

「そういえば」

「なっ、何だ？」

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

「……」

箒は、俺の言葉を聞くなり、固まった。

「何でそんなことしているんだ？」

「何でって、新聞で見たし」

「な、何で新聞なんか見てるんだ」

箒は、俺に新聞を見るなというのか。ひでえな。

「あと、久しぶり。六年ぶりだけど、箒だっすぐにわかったぞ」

「よ、よく覚えていたものだな」

「当たり前だろ？幼馴染ことくらい」

「そ、そうか？」

「ああ、忘れはしないさ、大切な友達の一人なんだからな」

「そうか…」

篤がいきなりへこんだ。 why?なぜ?

「やばい、あと少しで授業が始まる！走るぞ篤！」

「あ、ああ」

「セーフ」

「アウトだ、馬鹿者！」

バシーン！！

午前中だけで脳細胞が三万個死んだ。

## 第一話 女だらけのIS学園（後書き）

誤字、感想お待ちしております。

## 第二話 初対面なのに失礼な！by 明久（前書き）

どうも、カルボナーラです。

今度から、字を少なくして早く更新することにしようと思います。

## 第二話 初対面なのに失礼な！by 明久

二時間目の休み時間、僕達は今後に関しての疑問を話し合っていた。

「僕達の扱いって、研究のサンプルということでもいいの？」

「少し違うが、お前にしては上出来だな」

「わしらは今までに前例のない、男子のIS操縦者じゃからの」

「……つまりは珍獣」

「それって酷くね？」

「仕方がねえだろ、実際のところ、俺らの存在は世界的な異例なんだからな」

「ちよつとよろしくて？」

「「ん？」「」 「なんじゃ？」 「へ？」」

「まあ！何ですの？そのお返事は？」

「（（何だ？この時代に取り残された、古い漫画に出てきそうな喋り方の女は？）（（」

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」「すまぬな。わしも、主のことは知らぬのじゃ」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？」

イギリス代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」

ふんセシリアって言うのか。

「一つ質問いいk「代表候補生は国家IS操縦者の候補生だ、単語で解るだろうが」そうなのか」

「そう！エリートなのですわ！」

いきなり上機嫌になったな。

「この私とクラスを同じくするだけでも幸運なのですから。その現実をもう少し理解していただける？」

「……そうか。それはラッキーだ（じゃ）」「……」

「……馬鹿にしていますの？」

失礼な。君が幸運だって言ったんじゃないか。

「まあ、いいですわ。」

わたくしは優秀ですから、貴方方の様な方々でも優しくしてあげますわよ」

おお、この態度が優しさなのか。十五年生きてきて初めて知ったよ。これが優しさなら、一夏達はどれだけ善い人なんだろう？

「まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートです

から」

「それならわしらも、倒したんじゃが？」

「はあ？」

「一夏のは、偶然と言ってもいいが、俺達は確実に倒したな」

「雄二とムッツリー二はほぼ瞬殺だったもんね」

「わしらも少々時間はかかったものの、勝ったからのう」

「わ、わたくしだけと聞きましたか？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

あちゃあ、一夏は爆弾を落としちゃったよ。  
キーンコーンカーンコーン。

「っ……！また後できますわ！逃げないことね！よくって！」

よくない。でも言ったら怒られるだろうから言わないようにしよう。

次の授業で明久たちが大変な目に遭う事は誰も知らない。

**第二話 初対面なのに失礼な！by 明久（後書き）**

明久を鋭くしすぎた気がするのは気のせいかな。

誤字脱字があればよろしく願います。

感想おまちしてまゝす。



### 第三話 お前じるときにやられはしないロムッシリリーニ（前書き）

どうもカルボナーラです。

やっとテストが終わったのでのんびりできる。

### 第三話 お前ごときにやられないbymツツリーニ

「授業を始める前にクラス代表を決めなければな、クラス代表とはそのままの意味だ。」

「対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席など、簡単に言うとかラス長だ。」

「一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

「ずいぶん面倒くさそうな役職だな。」

「先手を打って奴等の動きを止めるか。」

「はい！織斑君を推薦します」

「私もそれがいいと思います！」

「……俺も（僕も）（わしも）、一夏がいいと思うぜ（います）（んじゃ）」「」「」

「はあ？なら俺は、ムツツリーニと明久、雄二、秀吉を推薦するぜ」

「「一夏！なんてことをしやる！」「」」

「……なぜ俺を？答え次第では許さない！」

「わしまで推薦しよって、なんてことをしてくれたんじゃ！」

「ちょ、ちょっと待った！俺にやらせようとした奴が言える事か！」

「んんっ、とにかく他薦されたものに拒否権はない」

くそっ、明久や雄二が推薦されても俺がやられることは無いと思っていたのに。

バンッ！

「待ってください！納得がいきませんわ！」

そう言い、机を叩きながら立ち上がったのは、セシリアだった。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！」

わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

こいつはなぜ男をそこまで怒らせたがるのかわからん。

「大体、クラス代表は実力トップになるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

「……ずいぶん自信があるじゃないか」

「なっ！」

「ムツツリーニ！？」「」

「ムツツリーニ、もしかして怒ってる？」「」

「……なんのことだ？」「」

「もしかして無意識で言っちゃったの？」

「……しまった」

「あなた、今自信がどうか言っていましたわね？」

言ってしまったならしょうがない。

「確かに言ったが？」

「勿論ですわ、少なくとも、あなた方よりは、強いですわ！」

「……その自意識過剰な考え、いつか自分を苦しめるぞ」

「な、なんですてえ！あなた！わたくしを侮辱しますの！？」

「……先に侮辱したのはお前だ」

「決闘ですわ！」

「お前ごときに遅れは取らない」

ムツリーニsaid out

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

明久said

「言い切ったな」

「そうだね、ゲストの秀吉さん、この後どうなりますかね？」

「そうじゃなあ、この後はムッツリーニが決闘を挑むんじゃないかのう」

「なるほど、実況の雄二さん、どうでしょうか？」

「そうだなあ、このままいけば、俺達が巻き込まれる確立が高いだろうな」

「どうして？」

「ムッツリーニが決闘を受ければ俺達も参加しなきゃいけないる」

「僕たちまでなの？」

「当たり前だ、馬鹿だなあ、いいか、この話の発端は代表に誰がなるかということだ、

その候補として俺達も選ばれているんだ、そして、あいつが言った実力の話がでてくるという訳だ」

「…逃げなきゃ！！」

「逃げられると思うか？」

「鬼神襲来！！！」

バシン！バシン！

「頭があゝ！！」

「誰が鬼神だ」

明久said out

- - - - -

「頭があゝ!!」

「？」

「何事ですか？」

「んんっ、とにかく、勝負は一週間後の月曜。放課後に第三アリーナで行う。

織斑、土屋、吉井、坂本、木下、オルコットは準備しておくように。では授業を始める。

あと、織斑、おまえのISだが、準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

「よかったな一夏」

「ああ、これでお前らの仲間入りだな」

「「「へ？」」」

どうしたんだろう、クラスの空気が変わった。

「もしかして、吉井君達も持ってるの？」

「言っ てなかつ たか？」

「そういえばあの時に初めて使ったし、カメラで取られていた時は試験用ISだったからね」

「まあその話はおいとして、おめでとう、一夏」

「おめでとうじゃ」

「…おめでとう」

「よかったな、一夏」

「それでは、授業を始める」

### 第三話 お前じときによられはしないロムッシリニー（後書き）

感想お待ちします。



第四話 気絶させて黙らせるしか…by雄二（前書き）

どうもカルボナーラです。

感想どうもありがとうございます。

#### 第四話 気絶させて黙らせるしか…by雄二

キンコーンカーンコーン

「やっと終わった」

ようやく五時間目の授業が終わり、家に帰ろうとした時に

「織斑君達まだ教室にいたんですね。ちょうどよかったです。実は、寮の部屋が決まりました。」

いきなり来た山田先生にそう言われて

「僕達って一周間家からの通学のはずですよね？」

「そのはずだったんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したり、教員室と物置として使っていた部屋を掃除して何とか確保したんです。」

そして、二人部屋が二つ、相部屋が一つなんですけど、部屋割りは織斑君達で決めてください」

なんとということだ、僕達のパラダイスが一部屋と後は普通に過ごせる部屋か、これは

「ならじゃんけんで決めるか？ムツツリー二を除いて」

「…なぜ俺を抜く？」

「なら聞くが、お前は女子と一緒に血の海に沈まないでいられると  
いうのか？」

「問題ない、365通りのシュミレートをして365通りの出血を  
確認した」

それを聞いた瞬間皆黙た。

「あつ、あと、同室の相手は篠ノ之さんです」

「よし、明久が相部屋で決定だな、あとは俺達で部屋割りを決める  
か」

「（コクコク）」

「そうじゃな」

「どうやって決めるよ？」

「ちょっと待つてよ！なんでそうなるんだよ！」

「「「俺<sup>わし</sup>達はまだ死にたくない（んじゃ）！！！！！！」」「」」

「僕だつてまだ死にたくないよ！」

「じゃあ吉井君が相部屋ですね？」

「山田先生まで！？」

「あきらめる明久、骨は拾つてやる」

「何事か、騒々しい！」

「「げえ、鉄人」」

ゴン！ゴン！

「ぐはっ！」

「頭があゝ！」

「鉄人じゃない、西村先生と呼べ」

うわあ、すつつつげえ痛い。

「部屋割りには、織斑君と木下さん、坂本君と土屋君で相部屋が吉井君でいいですね？」

「理不尽だああ！！！！！」

「「五月蠅い」」

バシーン！ガツン！

「両サイドからのとんでもない威力の出席簿と拳がとてつもなく痛い！！！！！」

いつの間に来たのか織斑先生も明久に出席簿を落としていた。

「ところで、山田先生、なぜ今わしだけ「くん」ではなく「さん」

で確認したんじゃない？」

「あ、すいません、木下君でしたね」

「今回は注意だけじゃが、次はそうはいかぬから覚悟しておいてほしいのじゃ」

「わ、わかりました」

山田先生は脅えながら、ダーク秀吉（＝夏命名）の言葉に了解した。

そして、明久は

「何でこの理不尽な結果を受け入れなきゃならないんですか!？」

「大丈夫だ、お前は簡単には死なない」

「理不尽すぎるでしょ!」

「教師には敬語を使え!」

ゴン！バシーン！

「すいあせんでした〜！自分調子こいてました!」

土下座をしていた。

「わかればいい」

「ところで雄二やっぱりじゃんけんで決めよう」

「断る！……！」

「何だよ！」

「今すべてが丸く収まったのにわざわざ変える必要がある？」

「そうぞ明久、あきらめて逝って来い」

「なんかおかしくない？」

「何のことだ？」

「とにかく、じゃんけんで決めるなり他の方法で決めないかぎり納得しないからな！」

「大丈夫だ、お前が納得してなくても俺達（私）が納得している」

「理不尽すぎるだろ！しかも、何で織斑先生と西村先生まで入ってるんですか！？」

「気づいたら織斑先生と鉄人まで入っていた」

「面倒だな、こうなったら、気絶させて送るしかないか」

「そうですね、そうしますか？」

「ちょ、ちょっと待ってください、何で、」

「唯一の常識人かと思っていた山田先生まで入ってるんですか？」

気づいたら山田先生まで参加していた。

「明久が静まらないようだから仕方ない、じゃんけんで決めよう」

「最初からそうしろよ！」

「」「」「じゃんけん、ポン」「」「」

明久グー、雄二、一夏、ムッツリーニ、秀吉パー

「よし決まった」

「負けたああああ！」

「」「」「五月蠅い！」「」「」

バシン！ゴス！ゴツ！ドン！ガス！

ドタ！

「やっと沈んだか」

「長い戦いだっとな」

「とりあえず荷物のあるから一度帰るか」

雄二がそう言った瞬間

「そのことなら気にしなくてもいい、荷物なら、私が手配しておい

た」

「『『『あ、ありがとうございます』『『『

「必要最低限のものだけだがな、携帯の充電器と着替えがあれば大丈夫だろ」

「俺の荷物はこんなことがあるかとまとめておいてよかったぜ」

「流石雄二だな」

「…俺達の荷物はいつたどこに？」

「事務室に届いているはずだから取ってから部屋に行くように」

「わかりました、秀吉、悪いが明久を起こしてくれないか？」

「承知した」

そう言つと秀吉は明久に近づき

「明久よ、早く起きるのじゃ」

強く揺さぶつた

「・・・んん、秀吉？」

「早く仕度するのじゃ、もう行くんじゃ」

「わかつたよ」



「吉井君が1025室で織斑君と木下君が1026室、坂本君と土屋君が1024室です」

「わかりました、行くぞ」

「「わかった」」

「了解」

「承知したんじゃ」

そうして俺達の高校生活の一日が終了した。

隣の部屋がやけに五月蠅かったがきのせいだろう。

#### 第四話 気絶させて黙らせるしか…by雄二（後書き）

感想お待ちしております。

次回はムツツリーニ大活躍かも？

明久、雄二、秀吉、一夏、ムツツリーニ「「「「これからもよろしく！」「」「」

## 第五話 ムツツリーニって強かったんだなboyー夏（前書き）

久しぶりの投稿です。

テストも検定も終わって、ゆっくりできると思つととても嬉しいです。

## 第五話 ムツツリーニって強かったんだなby一夏

翌日 食堂

朝の食堂で一夏と秀吉、雄二が食事を取っていると、遅れて明久が来て、

「雄二」

「なんだ明久、つまらない用ならチヨキでしばくぞ」

「なんで昨日助けてくれなかったんだよ！」

「何かあったか？」

雄二は、いきなり明久に怒鳴られて何かあったかを考えていた  
すると、明久が肩を落として小刻みに震えだして

「ちょっとね…殺されかけたんだ…」

その言葉を聞いて、三人は何かあったかを悟って慰めていた

「よく生きて帰ってこれたな、明久」

「昨日の大きな音は、明久の部屋からじゃったのか」

「そうだったのか、大変だったな、明久…いつでも逃げてきていいぞ」

「ありがとう一夏、今度危なくなったら逃げ込ませてもらうよ」

雄二と一夏と秀吉が慰めてくれて少し涙目になっていた。  
こんな会話をしていると周りに陣取っていた娘達が

「吉井君、昨日凄かったよねえ」

「ほんとだよねえ、まさか真剣白刃取りを間近に見ることができ  
るなんてねえ」

これには、一夏と秀吉が苦笑いして、雄二が温かい目？で見ている。  
そして、明久は再び震えだしていた

「……………」

「……………」

「……………」

「そんなことより、雄二、ムツツリー二は？」

そう言われて、一夏と秀吉が辺りを見渡してムツツリー二がいない  
事に気がついた。

「三人とも今日が何の日だかもう忘れたのか？」

そう言うと二人は、わかった様な顔をしたが明久だけ

「今日って何かあったっけ？」

「「「はあー」」」

「何だよ！そのため息は！しかも、同調<sup>シンクロ</sup>して言うな！」

三人は再びため息をしていた

「明久、今日はオルコットとムッツリーニの試合の日だろ？」

雄二がそう言うと言久が

「や、やだな、雄二そんな事忘れてる訳ないだろ」

「完全に忘れてたな」

「そうじゃな」

「まあそうゆう事にしておいてやる」

「けど、そしたらなおさら朝食を食べないと駄目だろ？」

明久がいきなりそんなことを言つて、一夏が同意してくれた。

「確かにそうだよな、朝食を食べないと力が出ないだろうに」

すると、雄二が額に手を当てて

「ムッツリーニが女子と戦うんだぞ？しかも、相手はイギリスの代表候補生でスタイルがいい」

雄二の言葉を聞いて、二人が

「鼻血の海が出来上がるね」

「だからこそ、輸血パックを取りに行ってるんだろうよ、食事一回より命が大切ということだろうよ」

そう聞くと明久が何かを察したようで

「なら僕達も準備しなきゃね」

「そうだな、AEDと目隠しと棺桶とやっぱ輸血パックも持っておいたほうがいいかな？」

「いちよう持って行つといたほうがいいだろうな」

「棺桶の用意はしないでいいだろ…」

明久と雄二の会話を聞いて一夏が突っ込んでいた

「わしは、ムツツリー二の様子を見に行つて来ようかの」

「よしそうと決まれば早く飯食つちまおうぜ」

そう言うと、四人とも食事を終えた後、それぞれが走り出した。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

ピット内

一夏は、山田先生に言われてフィッティングをしながら明久と話し

ていた

「一夏はフィッティングもしなきゃ駄目なんだよね？」

「そうなんだよな準備のほうは任せたぜ、明久」

すると明久は一夏に拳を向けて

「大丈夫だよ、準備はもうできてるし」

「その手に持つてるものは何だ？」

手に持っていたのは、康太に渡すはずの目隠しが

「「これは！」」

流石の一夏も動揺を隠せずにいた

それもそのはず、たった今明久は準備ができたと言っていたし、  
康太が目隠しをせずに、アリーナに向かおうとしていたのだから

「明久、手に乗れ思いつ切り投げる！」

「そんなことしたら僕が死んじゃうよ！」

すると雄二がこの事態に気づいたらしく、康太を止めて

『明久、さっさと目隠し持って来い！』

いきなり康太の隣にいた雄二が明久を呼んだ  
そして明久の持っていた目隠しを受け取ると、康太はつけはじめた。



すると、雄二は真剣な表情をして

「ムツツリーニ、目隠しだけでは何があっても外すなよ、ハイパーセンサーで視力が上がっているお前が女子を見たら大変なことになる」

「…了解、行くぞ、風魔！」

目隠しをつけ終えた康太が、

一瞬光に包まれたら、ISを纏った姿で立っていた。

その姿は、いかにも『機械の忍者』というような格好で、

アンロック・ユニットは無く変わりにマフラーのように首に巻いた一枚の布が宙に漂っていた。

そして後ろの腰には小刀が、左右にはクナイがマウントされていた。

両腕には、籠手のようなものがついていた。

明久たちは

「速攻で倒せよ」

「油断しないで頑張れ」

「頑張つて勝ってくるのじゃ」

「…行ってくる」

そう言うと、康太は飛び立った。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

康太 said

明久たちの応援を受けて、アリーナのオルコットよりも少し下に浮かんでいた。

「…待たせた」

「あらあら、逃げずに来ましたの？ところで、その目隠しは何の真似ですか？」

安い挑発だな

「これは、ハンデだ、さっさと来い雑魚！」

そう言うオルコットは、顔を真っ赤にして

「な、なんですってえー！チャンス差し上げようと思いましたが、もう差し上げませんわ！」

そう言いながら銃で撃ってきたがレーザーは俺には当たらなかった

「…言った筈だ、お前程度に遅れは取らないと！」

俺はオルコットの上空に移動しそのまま二本の刀で切りつけてそのまま蹴り落とした。

「早く本気を出さないとすぐに終わるぞ？」

「もう怒りましたわ！踊りなさい！わたくしとブルーティアーズの奏でるワルツで！」

そう言つとオルコットの後ろから四つのブルーティアーズ（以下ビット）が飛んできてビームを撃ってきた。

「…面倒な」

「さあ、わたくしを雑魚呼ばわりしたことを後悔させて差し上げますわ！」

「つく！このままやられる訳には行かない！」

そう言つて後ろに回りこんできたビットの二つにクナイを投げ爆発させ、その爆風を利用して残りのビットを切り裂いた。

「…これで終わり！」

「掛かりましたわ、ブルーティアーズは六機ありましてよ！」

すると後ろのビットがこちらを向き、ミサイルを打ち出した。

「しまっ - -」

ドッカーン！

- - - - -  
- - - - -

ピット内

康太がセシリアを圧倒していた映像を見て、一夏と山田先生と篤が驚いていた。

「ムツツリー二ってこんなに強かったのか？」

一夏が驚いてる組の代表として質問してみた、その質問に雄二が答えてくれた。

「元々ムツツリー二の身体能力も常人離れているのに、さらに、ISで強化されているんだ、

代表候補どころか、国家代表ですら下手すりゃ見失うだろうよ」

「土屋の足の速さや反射神経は俺と同等かそれ以上だ、そんなあいつがさらに速くなったのだからついて行けるのは織斑先生のような、  
モンド・グロツソの優勝者くらいだろうな」

雄二の言葉に西村先生が付け足すように言った。  
「というか、いつの間に来たんだ？」

そんなことを思っていると、

ドッカーン！

「やばい！一夏はタンカの準備を、秀吉はAEDを持って来い！明久は、俺と一緒に輸血の準備だ！」

「了解！」「」

そう言くと、四人は準備を始めて30秒で準備を整えた。

「いったいどうしたというのだ？」

康太は、ミサイルの直撃を受けたといっても、絶対防御があるのだ

から怪我はしていないだろ!？」

その質問に答えたのは明久だった

「僕達は、怪我じゃなくて、ムツツリー二の『命』の心配をしているんだよ、

今の爆風で、もし目隠しが外れていたら大変なことになる」

そう言うのと四人は、険しい顔をしてモニターを見ていた。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

アリーナ

煙が晴れて康太は地面に吹っ飛んでいた

康太の目には、目隠しがついていて、明久たちはほっとしていた頃  
康太は、攻める準備をしていた

「まだ立っていらっしゃるようですね？ならば、これでフィナーレ  
ですわ!」

そう言うのとオルコットはミサイルを六発撃って銃で撃ってきた

「…終わらせる!」

そう言うのとレーザーを避けて、ミサイルを切ったりクナイで落としたり  
で加速し、

オルコットの前に着いた、そしてそのときに事態が起きた。  
康太のつけていた目隠しが切れて外れてしまったのだ。

「…つく！」ブツツツシャアアアアア！！！！！！！！！！

勢い良く鼻血を出して落ちていった、  
オルコットはいきなり目の前で落ちてゆく康太を見て放心状態にな  
っていた。

その頃、明久たちは、

「まずい！三人とも行くぞ！」

「おう！」 「了解！」 「承知！」

そう言うのと四人はISを展開して康太のもとへと飛んで行った。

「土屋さん、大丈夫ですよ！？」

オルコットは康太の隣に降りて強制解除されて倒れている康太の下  
に駆け寄った。

そして明久達は、すぐにその場に着き

「オルコットさんどいて！」

「エネルギー310チャージ！」

「チャージ完了じゃ！いつでもいけるぞ、明久！」

「蘇れ！蘇るんだ！ムツツリイーニ！！！！！！！！

ビリビリビリビリ！！！！

「よし安定してきた後は、輸血しながら揺らさないように慎重に行

くぞ！」

「了解！」 「承知！」

そう言うと雄二達はムツツリー二を保健室へと連れて行った。

その後、応急処置をしていた明久達の姿を見ていた教師は、

「見事な応急処置だった、30秒ほどでやり遂げるとは思わなかった。」

と、語っていた。

## 第五話 ムツツリー二って強かったんだなboyー夏（後書き）

感想お待ちしております。



第六話 やはり明久は馬鹿じやのうboy秀吉（前書き）

ムツツリーニをちよつと優しく書いてみました。

## 第六話 やはり明久は馬鹿じゃのうb y 秀吉

康太を保健室に連れて行つたあと、オルコットに謝られた。幸いな事に康太は、明日には学校に通う事が出来るようで、保健室の先生が明久達の応急処置を褒めていた。

明久達は食堂で夕飯を食べていた頃、セシリアは保健室の前で立っていた。

康太に謝るために来たのだが、中から鉄人と康太の話がきこえたのだ。

「土屋、このブレスレットをつける」

「これはいつたい？」

鉄人は康太に解るように説明をし始めた。

「これはリミッターだ、お前のISは普通のISの三倍ほどの速度が出る、それを抑えるための物だ」

「…なぜそのことを？」

康太は驚いていた、実際に速度は三倍は出る、だが、まだ明久達しか知らないはずのことを鉄人が知っていたからだ。

しかし、鉄人はこの反応に対して

「やはりお前と吉井木下には補修く拷問>が必要なようだな…」

「理不尽だ」

「当たり前だ、お前の機体とラファール・リヴァイブのパラメータを見たらすぐに判るだろうが！

その程度のこととも理解できないなら、教えるのが普通だろう？」

そのことを聞いた瞬間に恐ろしい光景を想像してしまった。

その光景は、鉄人と織斑先生による補修現場である。

「…生徒を殺す気か？」

自然とその言葉を口にしてしまい、鉄人の拳骨をもらい、悶え苦しんでいると鉄人が真剣な顔で話し始めた

「今日の試合、最初から本気でやればお前なら被弾なしで勝てただろう、なぜ本気でやらなかった？」

さらにお前は避けることのできるミサイルをわざわざ当たりに行った、なぜそのようなことをした？」

「…それは…」

康太は黙ってしまった、実際は、避けることも可能だったミサイルだがあえて当たりに行ったことにも理由はある、だがしかし、その理由を言うわけにはいかないと考えていた  
そして、鉄人が口を開いた

「これはあくまで俺の予想だ、

お前はオルコットの態度を直そうと考えた、だが、相手は代表候補生でプライドの高いオルコットだ、

お前は被弾して追い詰められて偶然勝ったように見せかけて、

相手のプライドを傷つけないようにしながら態度を直そうとした、  
だが、誤算は目隠しが外れてしまったことだろう。」

「……………」

康太は驚いた顔をしたが鉄人は「やはりそうだったか」と言い康太に

「先程オルコットが代表を辞退すると言ってきたこれでお前か吉井、  
坂本か木下か織斑になった、

明日、織斑先生から指示があるだろう、寮に戻ってゆっくり休むと  
いい」

そう言っていると、鉄人は立ち上がり部屋を出て行こうとして、振り返り

「あと、オルコットの件は内緒にしておいてやろう」

と言って出て行った、康太も着替えて寮に戻って行った。

翌朝

「それでは、一年一組クラス代表は織斑一夏君に決定です。あ、一  
繋がりでもいい感じですね！」

「はいい？」

一夏は山田先生の言った事で変な声を出してしまった。

「先生、質問です」

「はい、何ですか織斑君」

そう言うで一夏は

「何で俺が代表なんですか？ムツツリー二とセシリアが勝負して、セシリアが勝ったはずですよね？」

そう言う山田先生はいつもより堂々と

「それは「わたくしが辞退したからですわ！」はうう、私が答えようとしたのに…」

答えられずに、拗ねてしまった。

「ならムツツリー二がやるんじゃないのか？」

「……俺達、昨日のうちに織斑先生に断っておいた」「……」

康太が寮に戻る途中に雄二に電話を掛けて織斑先生の部屋に四人で断りに行ったのだ。

「畜生、そういうのは、明久の担当だろ！」

「僕の担当って何だよ！」

「本当はそうするつもりだったんだが、話てるところを見つかってな、確実に落と…代表を任せられる一夏にしたわけだ」

「本当はってなんだよ雄二！」

そんなことをしていると鉄人が明久の後ろに回り

「うるさいぞ、吉井！」

ゴスッ！

鉄人による拳骨をもらった

「何で僕だけなんですか」

「それはお前が一番うるさかったからだ吉井」

鉄人に怒られているうちに、織斑先生が

「では、代表は織斑、副代表は吉井、坂本ということで決定だ！」

そう聴いた瞬間

「「何いい！？」」

「うるさいぞ！吉井！」

ゴスッ！

明久は鉄人に怒られている途中で反応したせいで再び拳骨をもらった

「明久は良いとして、何で俺まで副代表なんですか？」

「それは副代表が二人必要な中で吉井を提案してきたし、お前は筆記テストにおいて織斑同様、

全教科満点で学力も申し分ないから私が推薦しておいた、どうだ、嬉しいかろう？」

「あ、ありがとうございます」

すると、周りは

「織斑君と坂本君って頭良いんだ！」

「テスト前に勉強教えてね！」

などと盛り上がっていた。

その頃吉井は、教室の後ろで土下座していた、それをちらちらと心配そうに見ている女子が一人いた。

## 第六話 やはり明久は馬鹿じやのうboy秀吉（後書き）

一夏と雄二をかなり頭良く書いてしまった気がする。

感想お待ちしています。

アンケートですが鉄人にISを持たせるか持たせないかを聞きたい  
と思います。

期限25日までとさせてもらいます。



第七話 酷いよ！おりむー！！b yのほほんさん（前書き）

アンケートのほう綺麗に分かれたので鉄人はISを持たせない方向で書きます。

## 第七話 酷いよ！おりむー！！b yのほほんさん

朝、明久と雄二と康太の三人は食堂にいた。

秀吉と一夏は早起きたらしく、この時、食事を終えて、部屋で着替えをしている途中だった。

明久 said

食堂で明久達は箒とセシリアも合流しての朝食を食べていた。

雄二はトーストとベーコンエッグにサラダとコーヒー

箒は焼鮭定職

セシリアはBLTサンドに紅茶

康太はクロワッサンにコーヒー

明久は食塩水とパンの耳ー（食堂のおばちゃんがくれた）を食べていた。

「明久、今日はパンの耳があるじゃないか、いったいどうしたんだ？」

「実はさっき、おばちゃんがくれたんだよ、一週間も食塩水と砂糖水だけの生活だったから心配してくれたみたい」

それを聞いたセシリアは

「一週間も食事を摂らなかったんですの！？」

「いや、ちゃんと食べてるよ、食塩水と砂糖水」

「それは食べてるというのか？」

幕に突っ込まれて考える明久を呆れたように見る雄二達するとセシリアが

「康太さんはほかの男性に比べるとあまり食べませんのですね」

「…朝から血が足りないから食欲が無い、今は輸血パックがほしい」

そう言ったら雄二がどこから出したのか、輸血パックを康太に渡した

「…ありがとう」

「今度から携帯しとけよ」

「けど雄二、何で輸血パックなんか持ってたの？」

明久がその場にいる皆を代表して質問した

「ムツツリー二が倒れるかもしれないからな、念には念を入れて持っておいたんだ」

「そういうことか」

納得したように四人はうなずいていた

「それに下手すれば俺はもうすぐ地獄を見るしな…」

雄二の呟きは誰にも聞こえなかった。

一方その頃

一夏 said

一夏は秀吉と一緒に先に登校していた

「おっは。おりむ、ひよりん」

寮を出たらすぐにそう言いながら寮から出て来たのは、袖の長い制服を着た布仏本音、通称のほほんさん（一夏命名）だ。

「おはよう、のほほんさん」

「おはようじゃ、ところで、わしの呼称は『ひよりん』で決定なのかの？」

秀吉は呼称が気にいらないのか不機嫌になり、のほほんさんに聞いていた。

別に、良いんじゃないか可愛くてと一夏が思っていたら

「一夏よ、後で少し、O H A N A S H Iしよつかの？」

なんで心を読めるんだろうか？

「一夏は考えてることが顔に表れるんじゃない」

いつのまにかダーク秀吉となっていた秀吉の後ろに鬼が見えはじめていた

「ごめんなさい」

「まあまあ、ひよりん落ちついて」

一夏が土下座をしているとのほほんさんが、ひらひらと袖を揺らしながら秀吉を落ち着かせていた。

話題を変えないとまずいと思った一夏は考えて、ふと疑問が浮かんできた。

「のほほんさん、今日は何でこんな早いんだ？」

いつもなら俺達が食事を終えて片付けている途中に食堂に来るぐらいだから、

起きるのは8時位だろうだが、今は7時30分寮から学校まで歩いても5分掛からないくらいなのに、

のほほんさんは、起きて学校に向かう俺達という。

すると、のほほんさんが手を腰に当てて偉そうにして

「なんと、私は生徒会のメンバーなのだ、

それで今日は朝から集まることになっているから速いんだよ」

「なんだって〜!!!」 「なんじゃと〜!!!」

俺達はその言葉を聞いて思わず叫んでしまった。

今日の前にいるのほほんさんは学力は下の中くらいでのんびりとしている生徒だ

そののほほんさんが生徒会ときたら明久達でも驚くだろう。

「いきなり叫ぶなんて酷いな」

そう言いながらパシパシと叩いてくるしぐさは、とても可愛かった

「それよりもおりむ」

「なんだ？」

「今日転校生が二人来るみたいだよ」

「なんと、それは本当かの？」

秀吉は機嫌が直っているようで、話に混じってきた

「ほんとだよ、ちなみに二人とも二組に入るんだって」

「そうなのか、このまま立ち止まったままだと邪魔になるかもしれないから、そろそろ歩き始めようか」

そう言うのと俺達は歩き始めて

のほほんさんが話しかけてきた

「おりむのISって倉治総研で作られたものだよね？」

「？そうだけど、それがどうしたんだ？」

そう言うとのほほんさんは一夏に迫って

「四組に日本の代表候補生の更識 簪って子がいるから謝っておいたほうが良いよ？」

おりむのISを急いで用意してたから、かんちゃんのISまだ出  
来てないんだよ」

「そうだったのか、ところで今『かんちゃん』って言ってたけど知

り合いなのか？」

「そうだよ、私はかんちゃんの専属メイドなのだよ」

再び衝撃的事実に叫んでしまった一夏と秀吉はすでに校門前に着いていたので、

朝練がある生徒から注目されていた。

基本的にのほほんさんをメイドにするのは間違っていると思う。

… かえって仕事が増えそうな気がするから…

「ああ、おりむ、今失礼なこと考えたでしょう」

そしてまたパシパシと叩かれていた、一夏と秀吉はふと疑問が浮かんだ。

「そういえば、さっきの話から予想して、更識さんは専用機を持っていないのかの？」

「そうなんだ、倉治総研の人達は『白式』の後付装備イコライザに入る装備を開発中だとかで、

かんちゃんの『打鉄・弐式』の開発を止めちゃってるから、かんちゃんが引き取って、今頃は、

整備室で組み立てている途中だと思うよ」

一夏はそれを聞くと走り出して途中で振り返って

「悪い秀吉、俺の鞍机の上に置いといてくれ」

そう言って一夏は走り去った

「おりむゝは偉いね」

のほほんさんは一夏がどうするかがわかっていようので、一夏を褒めたら、一夏を追って行ってしまった。

秀吉も一夏が何をするかがわかったから、教室へと向かった。その途中で秀吉は

「のほほんさんは集まりがあると言っておったはずじゃが大丈夫かの？」

そう思っていた。

予断だが、放課後に学園中に某電気鼠のような悲鳴が聞こえたそうだ

一夏 said

整備室に着いた一夏は、室内でISのデータをいじっている女の子へと走って行き

「すみませんでしたあああ！！！！」

「きゃっ！」

と言いながらジャンピングスライディング土下座をした。

勿論の事だが女の子は驚いていた。

軽く悲鳴を上げるくらいに…

そんなことはお構いなしに話し始める一夏

「俺のせいで専用機の開発が止まったって聞いて、俺はそんなこと知らなかったからすぐに誤りにこれずにすいませんでしたあああ！！」



それを聞いて女の子はやつと謝罪の理由がわかったようで

「大丈夫だから…そんなに…謝らない…で」

そう言うのと再びデータをいじり始めた。

それをみて一夏は良い事思いついたと言わんばかりの顔をして

「更識さん、俺にも何か手伝わせてくれないか？」

こんなんでお詫びになるとも思わないが、何か手伝わせてくれ」

そう言うのと一夏は簪の前に回り込み簪に言った。

「なら私のことは名前で呼んで、苗字はあまり好きじゃないの」

簪のはつきりとした口調に一夏は了承して、明日から手伝うことを約束した。

その場を影からこっそりと聞いている人物に気づかなかった二人は整備室を後にした。

その影にいた人物はのほほんさんだが、いつものようなおどけた雰囲気とは違い真剣そのもので、

「おりむ、かんちゃんを泣かさないでね…」

一人になった整備室では誰もこの言葉に返事をくれなかった。のほほんさんは整備室を後にするいつもの雰囲気に戻っていた。

第七話 酷いよ！おりむぐー！！b yのほほんさん（後書き）

次回は、転校生の正体が明らかに！

作中にヒントが出たので気がついた人もいるかもしれませんが。

感想お待ちしています。



鈴は少し体を震わせてもう一度しっかりと宣戦布告しようとした。

「ぎゃあああああ！！！！！！翔子！放せ！放してくれ！！」

「……雄二、浮気は許さない！」

「翔子まずは話を聞きゃあああああ！！！！！！！！！！」

有無を言わせぬアイアンクローで雄二を締め上げている女の子。  
あえて聞こう、何があったか？

朝

明久が支度に手間取っている時に雄二と康太は先に行くと言って出てきた。

そのまま少し歩くと

「ムツツリー二、荷物を机の上に置いといてくれ！」

そう言うや走って寮へと走り去った雄二に忘れ物かと思ったが  
ビュン！！

もの凄い速さで走り抜けて行ったもう一人が寮の中へと入った瞬間

「追いかけてくるな~~~~！！！！！！」

と言う声が聞こえて、康太は

「今日も平和」

と言い歩き出すと後ろから来たセシリアと登校した。  
途中幾度も倒れかけたのは勿論だった。

雄二 said

「（何でだ！？何で翔子がいるんだ！？  
今朝ムツツリー二と登校していて良く知る幼馴染に似ていると思えば本人が着ているだと。）」

今現在雄二の後ろを走って追いかけている女の子、翔子はIS学園ではなく藍越学園に通っているはずなのに、なんでIS学園の制服を着ているんだ、と雄二は思いながら逃げている。

「…雄二、何で逃げるの？」

雄二は覚悟を決めて窓からダイブ、二階からならいくらなんでもやらないだろう、

ドン！ドン！

ん？いま着地音が二つ、俺の分とまさか・・・

「雄二、逃がさない！」

「畜生！何でついてこれるんだ！！」

雄二はそう思いながらも走り始めた。

靴を変えたら、全力で階段を駆け上がり教室の前についた。

「ふう、やつとまい

翔k!!!!!!!!!!」

いきなり目の前に現れたかと思うと逃げる前にアイアンクローを決められた。

「明久誰なんだあの子は？雄二をアイアンクローで持ち上げるなんて只者じゃないぞ」

「あの子は霧島さん、霧島きりしま 翔子さんしょうこだよ。

雄二の幼馴染で中学での雄二と同じ学年トップの成績を持ってるんだ。」

「ところで助けないでいいのか？雄二のが垂れ始めたぞ？」

一夏は雄二の方を向きながら言ってきた。

「大丈夫だよ、流石にそんなことは

」

明久は固まってしまった、雄二の状況は手が力無くたれていて力が入っていないのがすぐに判る状態だ。

すぐに戻った明久達は急いで雄二を助けることにした。すると

「あたしを無視するなあああ！！！！」

いきなり鈴が大声を出した、だが

「早くしないと雄二が死んじゃう！！！！」

それどころではなかった明久達は、鈴をどけて雄二の救出に向かった。

「霧島さん、早く手を放して！雄二が死んじゃう！」

そう言うとき翔子は手を放して特別救助班の手当てを受けていた。  
バカたち

「心臓の反応が弱まっておるんじゃない！」

「ムツツリー二、AEDの準備を急いで！雄二だから310チャージ！」

「300了解！」

「明久、タンカを持ってきたぞ！」

「一夏は保健室に行って先生に報告とベッドを開けてもらってきて！」

「任せておけ！」

タッタッタッタッタン！  
ドサ！

「300チャージ完了！」

「3、2、1」

ビリビリ！スパン！スパン！

「グハッ！」

いきなり頭を叩かれて頭を抑えている明久と康太は後ろを見ると、そこには織斑先生と保健室へと向かったはずの一夏が引きずられている状態でした。

「何をやっているか馬鹿者が！」

「一夏大丈夫か！」

この時クラスの皆は固まっていた。  
織斑先生を無視する明久に驚いていたのだ。

「…すまない明久、先に…逝…く…」

「一夏あゝ！」

「明久よ、雄二のほうが安定してきたんじゃない」

「なら急いで保健室に連れて行くよ！秀吉手伝って！」

「承知！」

そう言うのとタンカに雄二を乗せると明久と秀吉は走って保健室へと向かった。

そして残るのは明久に無視されて怒っていた織斑先生とクラスの皆だった。

「…フッフッフ、吉井なかなかいい度胸じゃないか、この私を無視



するとはな」

最高の笑顔で笑う織斑先生を見た生徒は皆、涙目になっていた。

第八話 私を無視するとはな… by 千冬（後書き）

感想お待ちします。

## 第九話 覚悟はいいな、吉井？

翌日 雄二サイド

朝のSHRの前に織斑先生が来て、明久に補修をさせると言うことを伝えていたら。

「すみませんでした！織斑先生、とにかく鉄人の補修5時間×1週間は勘弁して下さい！」

「静かにしろ、吉井！」

バシン！

「ぐべらあ！」

「1週間が嫌なら1カ月にしてやろう、嬉しいだろう吉井」

「鉄人！？いつの間に来たんですか？」

「吉井、貴様は俺を馬鹿にしてるのか敬意を払っているのか、わからなくなるな」

「すみませんでした！お願いしますから補習1ヶ月は勘弁して下さい！」

「そうです！明久にそんなことしたら死んでしまいます！」

「失礼な！1ヶ月の補習なんて僕にとっては楽勝だよ」

一夏達は『やりやがった』って顔で明久を見ていた。  
俺も勿論温かい目で見ているけど。

「ならなんの問題もないな吉井」

「へ？」

「ならば明日から1ヶ月、放課後5時間の補習を始める、逃げたら  
どうなるか、いいな吉井？」

「しまったああ！」

「五月蠅いぞ吉井！」

「ぐはっ！」

明久は朝から織斑先生からの宣言に抗議していたが、鉄人が来て、  
助け船を出した筈の言葉に反論して結局補習を受ける事になった。

「流石だな明久、自分から補習を受けに行くとわ、俺には真似出来  
ないぜ」

「……生きて帰ってこい、明久」

「明久よ勇者じゃな」

「明久、お前の事は忘れない！」

「五月蠅いぞお前ら！」

スパーン！

「くくくくびぎゃー！」「くくく」

打撃音は一回なのに五人にきちんと出席簿を落とした。  
本当に人間なのか？人間じゃなくて悪魔だったりして。

「貴様ら、今失礼な事を考えてなかったか？」

「くくくくいえいえ滅相もございません」「くくく」

「ほう」

バシン！バシン！バシン！バシン！バシン！

「くくくくすいませんでした！」「くくく」

「わかれば良い」

なぜこの美人悪魔は人の心が読めるのか。

バシン！

…解せぬ。

こうして朝のSHRは終わった。

- - - - -

昼休み

「やっと昼休みだ〜」

地獄の午前授業が終わって明久達は食堂に向かっていた。

「待っていたわよ！明久！」

「雄二…待ってた」

「しょ、翔子」

「鈴と霧島さんだったか？今から食堂に行くけどよかったら一緒にどうだ？」

一夏が提案した瞬間に雄二が回れ右して即座にダッシュした。

「おい雄二！どこ行くだよ！？」

「悪い一夏！急用ができた！」

「雄二…逃がさない！」

そう言っで霧島さんも走って行ってしまった。

その後に見えなくなったところで雄二の叫び声が聞こえた。

「ムツツリー二、今日は何を食うんだ？」

「俺は、「わたくし、今日はお弁当を作って来ましたの、よろしければどうですか？土屋さん」…ご馳走になる」

「そうか、明久はどうする？またパンの耳か？」

「失礼な！きちんとしたのを食べるよ」

明久の発言で鈴以外が驚いていた。

「本当なのか！？明久」

「本当だよ、やっと仕送りが来たから食べれるよ」

「そうか、俺はラーメンにするかな」

「なら僕はパエリアにしようかな」

食券を買ったから皆で注文の品を受け取り。

全員で座れる、テーブル席が空いていたのでそこに座った。

そして…

惨劇が始まった。

「では土屋さん、どうぞ」

そう言って出してきたのはサンドウィッチで凄い見た目が美味しそうにできている。

「…頂きます」

そう言って康太はそのサンドウィッチを口にして、倒れた。

これには、食事をしていた。明久達も驚いてすぐにAEDを取り出して、歩み寄った。

「どうした、ムツツリー二！」

「…なんでもない」

そう言った康太だが足が生まれたての小鹿以上に震えている  
これは大事だと思った三人はセシリアの料理を見た。

「なあセシリア俺も一つもらっていいか？」

「いいですよ」

そう言って貰ったサンドウィッチを食べた一夏は、倒れた。  
そしてこれを見た明久と秀吉の中で納得がいった、この料理は、化<sup>ケミ</sup>  
カルウェボン学兵器だと。

「一夏、（胃のほう）大丈夫かい？」

「大丈夫だ（かなりの威力だぞこいつは！）」

「ムツツリー二、せっかく貰ったんだから残さず食べなよ？」

明久はムツツリー二に全ての処理を任せた。

「任せておけ…あの川の向こうに行けばいいのだろう？」

「だめだ！ムツツリー二！その川を涉ったら帰ってこれないよ！？  
それは三途の川だよ！？」



不味い！これは本当に不味い状態だ！ムツツリーニの目のハイライ  
トが消えている。

「仕方ない、一夏サンドウィッチを」

「了解、けどどうするんだ？」

「いいから見てて」

明久はサンドウィッチを一つ取ると康太の口に突っ込んだ。

「明久！それはやばいだろ！？」

「大丈夫だと思うよ…たぶん」

「やばい！ムツツリーニの顔色が酷い色になってる！」

「秀吉、300」チャージ！」

「300チャージ完了じゃ！いつでもいけるんじゃ」

「蘇れムツツリーニ！」

ビリビリビリ

「…ここはいたい」

「よかった、助かったんもが！」

明久は口をふさがれた、サンドウィッチによって。

ボタン

「明久！しっかりしろ！」

明久の口の中にサンドウィッチが三個分ほど詰めてあった。

あの一瞬のうちに三つの凶器を明久の口に詰めたことに驚いていると一夏は一步下がって何かを避けた。

その避けた物の正体は先程、明久の口につめられた凶器と同じものである。

「ムツツリーニ、やめようとは思わないか？明久の中に詰めるということで」

「いいだろう」

俺は明久の口を開けさせて凶器をムツツリーニを入れた。  
そしてAEDで蘇らせた。

「よくもやったな！ムツツリーニ」

「お前がやったんだろうが」

二人はクロスカウンターのようにして互いの口の中にその凶器を入れた。

一夏は明久が投げた凶器が口に入って沈んでいた。

そのとき秀吉は近くの壁に寄りかかるように体育座りをして頭を抱えていた。

そして休み時間が終わった、女子は食事を終えて教室に帰っていたので置いてけぼり状態でチャイムがなっても戻ってこない明久達を探しに来た織斑先生がこの光景をみたときに。

「なんだ、このカオスな状況は？」

と言ったそうだが。

俺達四人は出席簿で叩かれて意識が戻り。

罰として、放課後に教室掃除をすることになった。

後日、明久は鈴を怒らせたと言っていて落ち込んでいた。そして、対抗戦の一回戦の相手が二組だった。

第九話 覚悟はいいな、吉井？（後書き）

感想お待ちします。

第十話 覚悟しなさい？b y 鈴（前書き）

投稿がかなり遅れました。

すいませんでした！

## 第十話 覚悟しなさい？by鈴

「お、おはよう」

「明久、今日は試合なんだから早くしろよ」

朝から明久は補修によって疲れ果てていた。

「雄二、何か食べ物ない？」

「お前も何か買えばいいじゃないか」

「そうだった・・・買ってくるよ」

「そんな暇は無い！さっさと行くぞ」

「待ってよ雄二、せめてカリーメイトだけでも食べさせて」

「いいから行くぞ！」

「よくな〜い！」

明久の絶叫は食堂に響いた。

.....

ピット

一夏と秀吉とムツツリー二と千冬と山田先生とセシリア、篇の七人

はピットで試合の準備をしていた。

試合の10分前になって、ようやく見慣れた馬鹿が二人来た。約一名ミイラみたいに干からびているけど…

「遅かったな二人とも」

「俺は翔子に襲われて、逃げてから飯を食っていたら、明久が来たんで連行した」

そう言つてミイラを前に突き出して来た。

「お、お腹すい…た」

雄二が明久を放すと一夏が口を開いた。

「そう言えば今日の対戦相手は鈴と副代表二人だけど誰なんだ？」

「一人は翔子だったぞ」

「もう一人は誰なんだ？」

「わしの姉上なんじゃ」

秀吉はそう言つて鞆の中をあさつて明久の前に行った。

「明久よこれでよければ食べるかの？」

秀吉は持つてきていたカロリーメイトを差し出していた。

「ありがとう秀吉、今の君は女神に見えるよ」

「やっぱりあげないんじゃない？」

「馬鹿だな明久」

「・・・大馬鹿」

「至高の馬鹿だな」

「至高って何だよ!？」

「そろそろ始まるし行こうぜ」

「無視かよ!」

「さっさと行くぞ、馬鹿」

「待ってよ、おなががすいてそれど頃じゃないよ!」

「気にするな」

「我慢しろ」

「二人して酷いじゃないか!」

「うるさいな、一夏、そっちの腕掴め、連行するぞ」

「了解」

「待って!頼むから何かカロリーを頂戴、頼む拝むから!誰か助け



てえ！」

山田先生は苦笑いしていて、他の五人は目を逸らしていた。

「この裏切り者〜」

一夏と雄二の二人に両腕をつかまれた状態で明久はアリーナに向かった。

- - - - -

アリーナ内

一夏達の登場により、会場が緊張に包まれていった。

一夏達三人を除いて。

「こら、明久！暴れんなんて」

「離して一夏！僕が死んでもいいのかい？」

「その程度で死ぬならお前は此处に居ないだろうが」

一夏、明久、雄二の三人は馬鹿をしていると、いきなり殺気が飛んできてそちらに視線をやると

鈴が怒っているようで睨んできている。

「ずいぶん遅かったじゃない、明久！」

「この感じ、鈴か、も〜う一夏何かしたの？早く謝ってよ〜」

一夏と雄二はアイコンタクトをして頷くと、雄二は手を離して一夏が明久を逃がさないように手を持っている状態になった。

「それは悪かったなお詫びといつては何だが、一夏」

「任せろ」

そう言つて一夏は鈴の隣にやってきた。

「機嫌直せよ鈴、こいつやるからさ」

いちかは あきひさを さしだした

「ありがとう、あたしは手を出さないから後は任せたわよ二人とも、じゃあね！」

鈴は明久を受け取るとアリーナの端に飛んでいった。残された翔子と優子はやれやれという感じで見ていた。

「あなたが織斑君ね、はじめましていつも弟がお世話になっています。私は、木下 優子です。よろしく願いします」

「こちらこそ、織斑 一夏です。よろしく願いします」

「一夏君と呼んでもいいかしら？」

「ああ、俺も優子と呼んでもいいか？」

「どうぞ」

優子が丁寧に自己紹介をしたので一夏も自己紹介をしていた。

「・・・雄二、私が勝つたらなんでも一つ言うことを聞いて」

「わかった、俺が勝つたらお前が言うことを聞けよ」

「・・・わかった」

「一夏君」

「何だ？」

「私達も負けたほうが言う事聞くことで勝負しようか？」

「それ面白そうだな、いいぜ」

「一夏！翔子たちを」

「おう！」

「二人を倒すぞ！！」

二人は少し相手と距離をとって、それぞれの武器を構えて言った。  
それにあわせて翔子達も武器を構えた。

「・・・優子、私たちも」

「ええそうね」

「絶対に負けない!!」

そして開始のブザーが鳴るのを待っていると。

「吉井！凰！早く戻って構えろ！いつまでも始められないではないか！」

鉄人の怒鳴り声で明久達はそれぞれの位置に行って、武器を構えた。それと同時に開始のブザーが鳴った。

第十話 覚悟しなさい？b y 鈴（後書き）

感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7940s/>

---

IS <インフィニット・ストラトス> 馬鹿の集いしIS学園

2011年12月31日22時50分発行